

オペラ 天海

演奏会形式版脚本

公演情報

公演日：2024年1月20日

会場：アレイホール（下北沢）

主催：Creative Garden “Core”

助成：さわかみオペラ芸術振興財団

「みんなの寄付」

出演

藤岡弦太（天海役／バリトン）

飯田映理子（竹千代役／ソプラノ）

志田雄二（将門役／テノール）

篠宮久徳（ピアノ）

高橋悠之輔（語り・鍵盤ハーモニカ）

演目：

オペラ「天海」演奏会形式公演版

脚本・作曲：高橋悠之輔

1

序曲

(鍵盤ハーモニカとピアノによる序曲)

2

語り 霜月も半ばを過ぎたころのお話でござ
います。

季節は晩秋。

空気は、やがて来(きた)る死の季節の
到来を告げるかのように凍てついてお
り、澄み渡る夜の天蓋には、美しい上弦
の月が架かっておりました。南光坊天
海僧正は、江戸城での講話を終え、その
後の宴の席を中座し、北門より一人、城
を後にして歩き始めます。

程なくイギリス人商人ロバート(ロビ
ン=駒鳥)と行き合い、しばしの立ち話
を始めるのでした。

ロバート Whatever the case, it doesn't make
sense at all,
Bakufu's decision, locating the capital
Three hundred miles from Kyoto.
It's arrogant attitude and invites
unnecessary conflicts.

天海 This strategy profound to protect the
Shogunate,
Without being swayed by their relations
with Chotei,
Has been brought from decades of
thought.
Power struggles long and grueling deeply
related with Chotei,
Is what you, Foreigner, could not grasp to
the core.
(天海、天を仰ぐ)

A century of spilled blood and calamities,
A black snake, a curse in the sky, as it
were,
Has gone by. Imperial court heavily

tainted by conspiracies
Engulfed this whole land where dark
shadows lie everywhere.

ロバート What a pity it is, Your Holiness, the
story you told!
Please count me as a Japanese in this
land where I'm living.
姓も名も変えて、何年もこの国に仕
え
妻子もここ江戸にいるというのに

天海 然り然り
心意気素晴らしく何とも頼もしい
然れどもこの地に巢食う呪い
なかなか身に染みてはわからぬ
もの
I'm so appreciative of your information
concerning Suden's trends.
Our activities rely on such covert
intelligence.
Good luck to you,
And may the Buddha bless you.
(Suden=以心崇伝。徳川家に仕えた臨
濟宗の僧。内政・外交に貢献した。)

ロバート I'm glad to help you, Your Holiness.
Let us meet again soon.
Would you invite me to the tea
ceremony you'll hold?
I will collect pots of important
Information about Kyoto's
movements until then.

天海 (軽く頷き) それでは、梅の咲く前に。

(南光坊歩き出す。)

3

語り 江戸城より良(うしとら=北東)の
方角に数里下ると、海に沿って寂し

い街道が続いております。千住大橋を過ぎると人家も疎らで、夜が更ければ渡し守りの姿も見当たりません。上弦の月が傾く深夜、天海様は黙々と街道を往きます。『泰平の世を造り上げる』という、それはそれは途方もない志と共に…。また、その胸中には、情熱と、不安と、この大きな目的のために踏みつけてきた数多の命への慚愧の念が渦巻いているのでございました。

(前奏開始)

天海 この静けさはどうだ
上弦の月の禍々しさに
怯える鳥たちの溜息がきこえる

悪鬼ですら息を潜めむ (ん)

街道を往くは二匹
闇に紛れて野犬が数頭

老耄は狂った幻を
金の子鳥は青い野心を抱く
さもありなむ
さもありなむ

不穏な夢こそが人を突き動かすのだ
今も、昔も、これからも

この冷たさはどうだ
凍てついた風の鋭さに
震える鳥たちは逃れるように
眠りに落ちてゆく

企 (たくらみ) は眠らず
歯車は止まらぬ
物想いに耽る暇もない

征け征け老耄 (おいぼれ) よ
古 (いにしえ) の怨霊に目見え
この月の見届けるうちに
最後の仕掛を…

(天海、足を止める)

4

天海 それには旅のどもの芝居に幕を下ろさねばならぬ

(天海、月の方を振り返り、密かに自分を尾けてきた竹千代に声をかける。)

天海 竹千代様
恐れながら千住大橋を越えてより此方
何が起ころうとも仕方がない処
大して頼りにはなりませんまいが
どうぞお近くへ

(竹千代、月を背負って木陰から姿を現し、コマドリ (ロビン) の鳴き真似をする。)

竹千代 ヒンカラヒンカラ
ヒンカラヒンカラ

天海 これはこれは鳳 (おおとり) の子
駒鳥のように小さきものでもありま
すまい

竹千代 駒鳥を追い払ったのを見掛けたので
な
もう一羽くらいと眠り損ねた

天海 今宵は京より献茶があったとのこと

竹千代 あの手合いのものは口にせぬ

天海 またどうして…

竹千代 殺されても適わぬからな。

天海 これはまた物騒なことを…

竹千代 企みも噂も有象無象
おちおち眠ることもできぬゆえ
こうしてその方を尾けて来た訳だ
追っていけば追われることもない

天海 竹千代様を追う者など
城中にはおりますまい
お心が測りかねます

竹千代 止せ止せ、止せ止せ

お前に限ってそんな間抜けなこと
があるかくだらぬ遣り取りは抜きじゃ
天海、このような寂しい荒れ野までや
って来て何を企んでおる
(冗談めかして) 国崩しか、内通か

※ 家康の懐刀として徳川の天下統一のために暗躍
していた天海が、大阪冬の陣目前のこの状況で、
徳川の天下を台無しにするようなことはしない
であろうことは、子どもの目にも明らか。「いか
にも」と返答した天海の脳裏にあったのは、漠
然としてはいたが、人治主義からの脱却。その
意味で広義の「国崩しに」は該当するかもしれ
ない。

天海 いかにも
竹千代 アハハ、ハハハ…
天海よ、徳川の御恩を忘れるほど
毫碌しておるわけでもあるまい
天海 迷うておるのでございます
竹千代 けったいなことじゃ
天海 迷うておるのでございますよ
竹千代 迷うというのは江戸のことか
はたまた余のことか
天海 竹千代様のことでもあり
江戸のことでもあり
竹千代 ハテ…
今宵のそなたの、会見相手さえ判らぬ
のだぞ
天海 …どうかご容赦下され
今宵の約束の相手は
来るか否かも定かではないのでござ
います
竹千代 天下に名高い南光坊との会見を
すっぽかすような輩がおるものか！
天海 世の中はそのように、不確かなもの…
竹千代 口はぼったいことこの上なし！
こうなればそなたの魂胆を
この目でしかと見届けてやる！
…さっさとゆくぞ
余が自ら用心棒をしてやる。
天海 御意に

5

(二人は待ち合わせの方向へ歩みを進める。以
下セリフ。)

天海 こうして肩を並べて歩くのも一年振
りにございますな。
竹千代 一年も前ではない。梅の咲く前の頃だ。
天海 そうでしたかな。
竹千代 …そなたが不在のうちに色々あった。
天海 話は聞いておりまする。
竹千代 聞いた話ではしょうもない。
天海 聞く相手にも依りましょう。
竹千代 誰に聞いたとて同じこと。余のことは、
余にしか判らぬ。
天海 …いかにも。道理にございます。
竹千代 (苛ついて) 都合の悪いことほど表に
は出て来ぬのだ。
天海 お聞かせくださいませ。それまでにお
心を悩まされるわけを…
どれ程お役に立てるかは判りませぬ
が。ご懸念を僅かでも拭い去ることが
できれば…。
竹千代 …よく言うわ…。
なればいかに聞き苦しい話でも耐え
て聞け。悍(おぞ)ましき話をたっぷり
聞くことになろう。

6

竹千代 そなたにも説くこと能(あた)わぬ
道理もあらむ(ん)
余にも巧く語れぬ「事」が在る

奴のことじゃ…
元服すら迎えぬうちに
余の生き方、死に方を決めんとする
彼奴(きゃつ)の話をしよう

其奴は人のようで人で無く…
仕掛けのようで人の行いを成す

けたたましく押し入ってくる厚かま
しさ！

此方の都合などお構いなしじゃ
持て囃しては貶め、殺しかけては命
を救う

斯かる狼藉！嗚呼、この狼藉！
何物の所業であろうか！意図も貌も
見えぬ。
とんだ化け物じゃ…

只この化け物、標的は余ばかりではな
い
毒牙にかけんとするは縁者のみなら
ず（※徳川の縁者）
日の本の名だたる武士（もののふ）達、
天下の民草に至るまで…

…物狂いと思うてか…
その顔から色失いしは誰が為ぞ…
何ぞ思い至る所やある

祖父上を箱にしたのは
父上より心を奪ったのは
誰ぞ…

なぜ隠し続ける
嗚呼、答えられまい…

7

天海 流石ゆくゆくは將軍になろうお方
…ア、イヤ。侮っての言葉ではござい
ませぬ

世の中はまこと、複雑怪奇
拙僧とて、全てが見えているわけも
無く幾分か預かり知るのみ

御身をつけ狙う輩について
全く見当が付きませぬ
…竹千代様

竹千代 なんじゃ

天海 もし、その不屈き者が
この老耄と関わりあるとお思いなら
ばこの場でお斬りくだされ
…一言の弁明も致しませぬ

竹千代 ……

天海 ……

竹千代 ……（刀の柄から手を離す）

天海 …家康様のこと、他言無用にござい
まするぞ…

今この最後の仕上げの最中
日の本の一大事

血で血を洗い、民草を殺す
無間地獄に舞い戻るか

戦なき泰平の世が明るく世を照らす
か…

もう暫くの辛抱にございます。

竹千代 そなたらは其の大義のために
いずれ父上も余も箱にしてしまうの
だろう

天海 思いも寄らぬこと
決して父君は心を失われたのではな
く余りにご多忙ゆえのこと

8

語り やがて道は、空気の澱んだ窪地に差し
掛かります。晩秋の風がいつの間にか
雲を運び、月を隠しますと、あたりには
はいよいよ不穏な気配がいたします。
竹千代様と天海様は、六名ほどの殺気
だった賊に取り囲まれていることに
気づくのでございました。（前奏開始）

竹千代 二つ訊く

一つ…

世を桜の下にて刺したる者に
本当に心当たりあるまいな
拙僧に出来たことと云えば

天海

ご快癒をご祈祷することばかり
竹千代 二つ…
そなたの飼い犬は斯くも
鼻息荒く纏わり付くものか
天海 叡山の輩（ともがら）も江戸の庭番
もかような不躰とは無縁
竹千代 されば余が巻き込まれたか
そなたが巻き添えか。
天海 いずれにせよ降り懸かる火の粉は
竹千代 払わねばならぬ

9

語り 道中、突如賊の襲撃に遭うも、竹千代
様も天海様も大いに奮闘いたします。
ところが、なかなかの手練を送り込ま
れた上に、多勢に無勢。最初は威勢よ
く一人二人斬り伏せた竹千代様も、次
第に追い込まれてゆきました。ふと注
意がそれた刹那、竹千代様は不意を打
たれます。あわや斬られるかというこ
ろで、天海様が身を挺して庇い刀傷
を負われます。もはや絶体絶命かと思
われたその時、次々矢が射かけられ、
賊が続けざまに斃（たお）れてゆきま
す。天海様の手の者が追いつき、不逞
の輩を蹴散らしたのでございました。

太郎 僧正！（天海に駆け寄ると、素早く肩
の応急処置をする。）
次郎 竹千代様！お怪我は。
竹千代 余は何ともない。天海は
天海 幸い傷は浅いようで…
竹千代 （天海の手の者と合点し）出て来るの
が遅い！
次郎 平にご容赦を。護衛のものども悉く討
たれ、たった一人生き延びた手負いが
城に知らせたので、こうして馬を飛ば
して参りました。
天海 一町より遠くに離れて居（お）るよう
厳命しましたゆえ…。裏目に出ました
な。

竹千代 …待て、そんなに死んだのか。
太郎 四人が街道で。城に報せた者も生憎、
深手により…

（重い沈黙）

竹千代 余を狙ってのことか。
次郎 いえ。僧正を狙ってのことかと。よも
や竹千代様がおわすとは…
太郎 もしものことあったならば我らの首
では足りませぬ。何と大御所様に申し
開きをすれば良いか…
竹千代 大御所様…。ハハッ…。あの箱のこ
とか。（吐き捨てるように）
天海 竹千代様。
竹千代 祖父上は寛大なお方。その方らのよう
な役目に忠実な者を責めたりはせぬ。
次郎 畏れ多いことにございます。
天海 さ、竹千代様をお連れして城へ…
竹千代 ならぬ。
天海 しかし…

10

竹千代 そなたはまだ迷わねばならぬ
野良犬が暴れた
それが何だと云うのだ
手負いのそなたがそれでも征くので
あろう
余程のことじゃ
余も死に掛けたのだぞ
今更引かぬ
徳川の者として見届けるべき会見だ
余は征くぞ
天海 何とお強い方になられたのか
将来の将軍に相応しい
やがて何もかも識ることになろう
いずれ若君はこの仕掛けをあやつり
天下を治められる

竹千代 そなたはなお語らねばならぬ。
隠し通す心算りと
肚に決めていたとでも
いずれそんなものは明るみにでるも
のだろう覚悟を決めよ

もう後戻りはせぬ
今更何を
隠すことがあろう賽は投げられたの
だ
余は征くぞ

天海 ご決意堅しとあらば、仕方ありませぬ。
参りましょう。

(太郎と次郎、平伏し消える。再び天海と竹千代は街道を歩く)

11

天海 まことに勇ましゅう御成りに。幼き頃は病がちであらせらるれば、案じておりましたものの、今日の振る舞いの立派なこと。見違えましたぞ。

竹千代 …余は箱にはならぬ。徳川の者を使ってそなたらが何をせんとすか、確かめねばならぬ。

天海 拙僧の差図はただ一つ。泰平の世を造ることにございます。

竹千代 他意はない、と申すか。

天海 全く。

竹千代 …人を箱に換えてしまう連中の言(げん)は疑わしい限りじゃ。

天海 たとい狡いやり方と言われても

竹千代 不可解な話じゃ。

天海 きっと解っていただけの時が参るはず。

竹千代 考えられぬ。

語り 何事か、思うところがあったのでございましょうか。天海様は星を見上げるのでございました。(※天海は呪術や

占星学にも長けている。)

竹千代様があっと息を呑んだのはまさにその時。ちょうど、とある廃寺の境内に差し掛かった頃合いでありました。辺り一面に恐ろしい邪気が満ちております。そのために、草木までもが震え上がっているように感じられるのでございます。人ならぬバケモノたちに囲まれたような、薄気味悪い感覚にお二方は襲われ、思わず顔を見合わせるのです。

竹千代 天海よ、説明せい。

天海 恐ろしい気配。過去にも覚えがございませぬ。会見の相手はお待ちかねの様子。

竹千代 …引き返そう。人が来てはならぬ処だったのだ。

天海 もう遅いようで

12

語り

やがて、稲光が地上を走り、狐火が乱舞いたします。太鼓の破れるような恐ろしい音がそこかしこで鳴りやまず、邪気は益々勢いを増して、お二方を取り囲んだのでございます。次第に、その邪気は濃く集まって、人のような姿を取るではありませんか。

武士(もののふ)の亡霊を数多(あまた)従えた大怨霊、平将門公の出現でございませぬ。竹千代様も天海様も、たちまち亡霊たちに境内の中に押しやられ、将門公の面前に引き出されることとなったのでございました。

(前奏開始)

将門

待ちかねたぞ生臭坊主
なぜ了見も判らぬ小僧まで連れて来たのだ
かねてより噂は聞いておる
武人の陰に隠れ

天下に謀を巡らす
南光坊とはそなたのことであろう

仏の教えはどうした
お前からは血の匂いが立ち込めている
影には権力と富が映り込んでいるぞ

さあて南光坊
俺を呼び出した要件について詳しく聞
こうか
お前のまことの姿を申し述べよ

13

(将門の見えざる力によって天海は心の内の
誠を言葉にする。)

天海 百五十年余

只管に謀（はかりごと）を巡らし
徒に民草を苦しめ

人を焼き、村を焼き
飽き足らず略奪の牙を海の外にまで
向け
南蛮も巻き込んでの愚かな戦
戦、戦…

戦を終わらせる気持ちがあれど
一度戦に寄りかかって出来た生き方
今更改める術も知らず

刹那の栄光に恋々とし
神仏（かみほとけ）への裏切りを繰り返す

仕組みを変えねば
武士（もののふ）が力持たば
戦が止まぬは必定
ただ箱が力を持たば
いかにならむ

昔、京の公家衆が箱にされたように

我らは武士を箱に納めんとする者なり…

(以下はセリフ)

竹千代 余は箱にはならぬぞ
人の世は人が治めるもの
気味の悪い箱になんぞ世が治められ
るものか！
あれはなんじゃ。幽霊か化け物か
天海 かつて坂東にて民草のために京に逆
らい新皇の名乗りをあげた平将門公

14

天海 人ならざるものとして永遠を生くる
労（いたわ）しき御方かな
将門 自在な身を嘆くことはない
天海 崇め奉られ神となるには一厘足らず
その一厘を埋めて差し上げましょう
将門 異なことを言う
天海 汝のどこにそのような力が
神たるには膳立てが必要
それを仕立てる知恵がございます
将門 言ってくれる
天海 そなたが設えた神輿に乗れというか
さすれば八百万（やおよろず）の一つ
に
京に一矢報い
菅家（かんげ）と酒を酌み交わすこと
もありません
将門 つくづく愚かな奴だ
だが暇つぶしに乗ってやってもよい
その徒労の対価は何を求める
天海 永久（とこしえ）なる江戸の守護を
将門 徳川何某の作りし街か？
天海 小さく汚い街いかほどの価値やあら
ん
将門 お力を以ってすれば造作もなきこと
出来ぬとは言っておらぬ
天海 やがて百万の民を抱える街になりま
しょう
守護神たる御前（おんまえ）を民が慕

い
京を組み敷き、新しい世を
将門 随分と風呂敷を広げたな
その方の首ならどこまで飛んでゆく？
天海 目論見のない夢ではございませぬ
江戸は全ての富と権勢を集め
日の本は南蛮を押し返すような大国に
将門 はは！気に入った
そこまで言い切る愚劣の輩こそ面白い
い
力をかしてやろう

竹千代 正気か？奴は悪霊（あくれい）ぞ？
正道を以って人を治めるが徳川のやり方
いくら京から力を削ぎたいとて
恨み持つ悪霊を使うとは
天海 たとえ地獄に落ちるとも
あらゆる手段を使うこと厭わぬつもり
竹千代 逆徒であり朝敵だ
天海 朝廷はやがて排さねばなりません
竹千代 国が仰ぐべきは神や仏だ。怨霊ではない
天海 あれが神になればよいのです
竹千代 呆れたやつじゃ
国の仕組みに悪霊を用いるとは

語り 将門公は天海様と竹千代様のやりとりに業を煮やし、亡霊たちに命じて竹千代様を押しえつけます。天海様は手荒なことをせぬよう、将門公に厳に抗議をいたしました。将門公は竹千代様に契約の邪魔をさせぬようにしているだけと取り合いません。
ともあれまずは契約の儀式をと、将門公と天海様は契約の証文を作ります。

一方、亡霊の力で押しえ付けられた竹千代様は、怒りに燃えておられました。

人を箱にして利用し、怨霊の力を守護につけるなどとは、祖父君家康公の思い描いた泰平の世とは程遠いと、義憤にかられておられたのでございます。その熱く若い魂の輝きは、亡霊たちを恐れおののかせるほどでございました。その輝きゆえ、亡霊たちの手が緩み、竹千代様は将門公と天海様の前に踊り出します。
そして一刀の下に、契約の証文を切り捨てられたのでございます。

15

将門

なんということをしてくれたのだ
その幼い刀でダメになった
契約は不完全なものに

そちらの都合じゃが
約束は約束
坊主は俺を神にせい
俺は江戸を守護してやろう

しかし永久（とこしえ）とはいかぬ
せいぜい三百年
その猶予の間に
本物の泰平の世を作るがよい

あとはどうなろうと知らぬ
心に巣喰うと傲慢さが
江戸を根こそぎ焼くことになろうとて

なんとも威勢のいい童だ
しかれどもお前が戦わねばならぬのは
誰であろうか

妙な風が吹いてきたな、坊主よ
未来の大君の不興を買ったぞ

(以下セリフ)

天海 人の選択なれば、このように不確かなもの

知っておる。知っておる

竹千代 この際じゃ。はっきりさせよう
人でもない、訳の分からぬモノに政を
させんとするは邪道なり
たとえどんなお咎めがあろうと
お前を生かしておくわけにはいかぬ
覚悟せよ天海

語り 竹千代様は不拔の覚悟を持って、天海
様を討ち果たそうと襲いかかりまし
た。しかし、あまりに相手が悪い。
件の南光坊天海その人は、先の関ヶ原
合戦より、麒麟の大角をあしらった兜
に鎧をつけ戦場を駆け回った猛者で
あられました。
太刀を躲し、錫杖と刀の打ち合うこと
十数回。天海様が虚を突き、錫杖をも
って竹千代様の肩を強かに打ちます
と。竹千代様は気絶なさいます。
天海様は竹千代様を境内の木に凭れ
させ、寒風を凌ぐために、ご自分の羽
織を竹千代様に被せたのでございま
した。

16

将門 童（わっぱ）の慟哭に一理ある
天海 あえて仰るな
将門 いいや、俺は存外お喋りなのだ

坊主よ、お前の求める泰平の世はどこ
にもない
全き泰平の世などないのではと、俺は
思う
誰かを人身御供に捧げ
生贄をもってかりそめの泰平をえるな
らば
それは偽善というもの

さりとして、うち続く戦をおさめたき
お前の心もわかる
案ずるな

約束は守ってやろう

天海 計画はたがえても、京都を押さえ込む
ことはできるか
将門 造作もない、されど童（わっぱ）は、果
たして新しき世を統べてゆかれるのか
天海 全霊をもって拙僧がお守りいたす
将門 やれ、お前もわかりにくい男だ
邪魔になるのならば殺してしまっても
あるいは童（わっぱ）のためになったの
ではないか
天海 人の世を人が作るという理想もまた一
つ。或いは、私も己の範疇を越え過ぎた
のやも知れませぬな。
今すべきは、人の世を作ると決めた若
君のお助けしていくこととございます。

将門 我をうやうやしく江戸城の良（うしと
ら）に祀れ。悪鬼悪霊より守るには都合
もよかろう。

語り そこまで話すと、辺りに満ちていた邪
気が段々と晴れてまいります。いつし
か将門公と亡霊たちも姿を消したの
でございました。
天海様が合図の笛を吹きますと、手の
者が四人ばかりが集まって参ります。
竹千代様を背負い、一同は一路江戸城
へ向かうのでございました。

その後、竹千代様は家光と名乗られ、
将軍としてお勤めを果たされました。
将門公は江戸城より良の方角、神田明
神に祀られ、以降広く江戸の人々の信
仰を集めたのでございます。
家光様のもと、徳川家はあらゆる手段
を用いて国をまとめてゆきます。諸大
名の一切の反抗を許さず、京都を黙ら
せ、外患を放逐し、200年以上の泰平
の世の基礎を確立いたしました。その
辣腕の影には天海僧正のご活躍があ
ったものと、そのように思われます。